



旅  
立  
ち  
ハ  
「  
ド

モ  
ー  
ド

R-18  
for adults

『勇者生誕の地』と謳われる小さな村は、いまや勇者志願の男子が集う聖地となっている。ここから旅立てばきっと立派な勇者になり、いずれは魔王に打ち勝てるに違いない。彼らは皆希望に満ち溢れていた。また等しく強さと信念を持ち、人類の平和に貢献したいと考える素晴らしい金の卵ばかりであった。

……とはまあ、名目だ。

勇者を目指す男子は大抵家柄が良いだけで、ほとんどが自身の实力を見誤った愚か者ばかり。だから『失踪者』も後を絶たないのだと思う。

その点、僕にその心配はまったくない。

実は、僕は先代魔王を倒した勇者の甥だ。名家の出で剣技の申し子。それに飽き足らず血筋まで優れているのだから、そこらの勇者候補とはわけが違う。

故郷は山を三つも超えた大きな城下町なのだが、叔父である勇者と同じ場所から旅立ちたくてわざわざこんな田舎まで来た。

なので、なんとなく聖地に行ってみようとフワフワ考えている奴らとは絶対に一緒にして欲しくない。

とまあ、ここまで話せば僕がいかに未来の勇者として有力候補なのかはわかってもらえたと思う。

さっそくこの村の村長に話を通して奨励金を受け取った。僕は叔父と同じ条件で旅立ちを迎えたかったので家からの援助は一切受けていない。よって、この僅かなお金だけが当分の頼りだ。

武器は愛用している剣があるから、防具をもっと上等なものにしておこう。のっけから怪我をしたんじゃ幸先が悪いものな。

防具屋の男は僕を頭の先から足元までジロジロと見まわしてニチャアと汚く笑っていた。

商人と接するのははじめてではないがやはり田舎は上品な人間が少ない。

半分ほどの重さになった財布を携えて、いよいよ僕は村の外に出た。

低級な魔物なら瞬殺できるくらいは腕に覚えがある。かかってこい魔物よ。今日という日が新しい勇者の伝説の幕開けだ。

万能感に満たされながら、森から吹いてくる気持ち良い風を受ける。そういえばあそこは次の町への近道になるらしい。空気も美味しそうだし、通っていこうかな。

小道から森の中へと歩いていく。ざわざわと葉の擦れる音すら僕の旅立ちを祝福してくれているようで気分が良かった。

叔父さん、見ていてくれますか。世界を救った後、すぐにご病気で亡くなってしまったあなたにはついでに会うことができなかったけれど……その志、その強さ、僕がすべて引き継ぎます。だから、見守ってください。

空に剣を掲げると、一筋の木漏れ日が反射して天を貫いた。奇跡のような光景に目を奪われる。チカッとその光が目の中に入った瞬間に……ズザッ！！！！

「なにっ……！？」

ボキイイツ！！！！！！！！！！

痛みに耐えきれないその絶叫が悲痛すぎて、自分のものだなんて思わなかった。  
利き腕をめちゃくちゃな方向に捻り上げられて、一瞬で骨が砕け散ったなんて……信じたく、なかった。

痛みの余韻が、恐怖が、襲い掛かってくる。魔物は僕の叫びを愉快に思ったのか、今度は左足を持ち上げて宙づりにしてきた。

終わるんだ、僕の、人生……今まで挫折なんてなかった、大怪我だってしたことないし、僕に勝てる友人も魔物もいなかったし……まさか、こんな、ことになるなんて……………。

「グアアアアアアアアアッ……！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

一生、治らないかもしれない……いや……。

僕の人生ごと、どうせもうここで終わりなのか……。

「いやだああ……じに、じにだぐない～……ごべんなざい、ゆるじでえ」

涙と鼻水をまき散らしながら力なく首を振る。

死にそうになって気付いた。僕はまだ生きていたい。何をしたいって生きていたいんだ。まだ、勇者としての覚悟なんて、全然決まっていなかった。

ずっと夢だったんだ。勇者としての功績をあげて、皆に尊敬されたい。

だけど、今は……今すぐ家に帰って、お母さんのシチューが食べたい……………。

ほんとうは、それだけで、よかったんだ……………。

僕の命乞いがわからないらしく、魔物は僕にふたたび叫び声を上げさせるべく左腕を掴み上げた。もう片腕まで折られたらショックで絶命する。そう悟って頭が真っ白になった。遠くから野太い叫び声が近づいてくる。これは魔物の声ではない。なんだ……？

グラッ

全身の痛みに耐えかねて、僕は意識を手放した。

ハッ

永遠のような眠りから覚める。その瞬間、右腕に激痛が走った。

「いづうっ……！」

どうやらあれは夢ではなかったようだ。捻じ曲がった右腕を見るのが怖くて、顔を逸らしながらおそるおそる左手で触れてみる。布のような感触がある。

そうっと視線をやると、包帯がぐるぐる巻きにされている。添え木もしてあるらしく、不自由ではあったが、いくらか精神は安定した。

誰かが助けてくれたんだ。そして、この宿屋に運んでくれた。

部屋の落ち着いた内装を見てなんとか理解する。気を失う前、男の人の声が近づいてきてい

たことも思い出した。

そうか、なんとか僕の命は助かったんだ……………。

「おや、目が覚めたのかい」

身体を起こそうとするが動かせず、軽く身じろぎしただけで終わった。それを察して声の主はベッド際まで来て顔を覗き込んでくれる。

優しいような中年の男だ。この人が僕を助けてくれたのか……………。

「あぶないところを……」

「無理なくていい。動くどころか話すのも辛いだろう」

「はい……」

「たまたま通りかかってよかった。私はこの宿をやっている者だよ」

どうやらここは僕が旅立ったあの村の宿屋らしい。これが不幸中の幸いというやつか。適切な治療も受けられたらしくて、気絶する前よりは痛みが遠のいている。

だが……このまま動けなくては旅立ちなど無理だ。家に帰りたい。父上、母上、僕がこんな怪我をしたと聞けばすぐに迎えに来てくれるだろう。

「あの、親に、連絡を……………」

「君の故郷は？」

「ルーデンプルク……」

「ほう、あの大国の。ずいぶんと遠くから来たんだねえ」

間延びするような声はどこかからかったような響きを含んでいる。怖くなって無理やり顔を上げるが、男は変わらず穏やかに微笑んでいた。……気のせいかな。

「ただしルーデンプルクとなるとツテがないな。なにせここは田舎の村だから。連絡手段がないんだよ」

「そんな……う、馬を、走らせれば……」

「馬なんてこの村にはいないよ」

そんな……手紙を届けることもできないのか。いや、どこかを經由すれば必ず届けられるはず。きつとこの人が手段を知らないだけだ。少しでも動けるようになったら他の大人に聞いてみよう。

とはいえ、今はこの人にしか頼れない。

「それより君、手ひどくやられたねえ。応急処置はしたが、このまま放っておけば一生腕が不自由になってしまうよ」

「そんな……………お願いします、然るべき、治療を……」

「この村ではそれも難しいよ。隣町まで行けば、いい医者がいるとも聞くが」

「っじゃあ……」

「馬車代」



ピシャリ、と戸を閉めたてるような響きだった。

そっけない冷えた声と笑みの消えた不気味な真顔を見て、今度こそ心臓が縮み上がった。恐怖のあまり、その言葉の意味を理解できたのは次に宿屋の主人が話した内容からだった。

「馬車代がいるよ。君も見ただろう。森を抜けるにはあのレベルの魔物たちの襲撃をかいぐぐっていかねばならない。用心棒を雇うお金も別で必要だね」

それは……………そうだろう。

頭では理解していても、実際は胸の中に失望が渦巻いていた。

なぜって彼から見れば自分などまだ子どもなのだ。だから期待してしまった。無償で助けてもらえる、などと。

「必ず、お返しします……僕の家は、裕福だからっ……だから親に連絡をしてください……そうしたら、倍にしてお支払いしますから……」

こう言えばなんとかしてくれるだろう。見たところ安宿だ。倍もらえとなれば気が変わるに違いない。

それにきっと僕の両親はほんとうに倍払ってでも僕を助けてくれる。一人っ子でたいそう可愛がられてきたのだ。きっと金額など問題ではない。

男は僕の言葉を聞くと一瞬顔を歪ませ、そしてまた、先ほどの穏やかな笑みを薄っぺらく貼り付けた。

「そうかい。きっと治療費も高くつくだろうからねえ。君の腕、骨は粉々だし、すぐにでも治療しないと後遺症が残るよ」

「後遺症……」

「剣を振るうどころか、日常生活も困難になるだろうね」

そんな。僕の完璧な人生が……………。

確かに、今巻かれている包帯もこの宿屋の主人がやってくれたもので適切な治療ではない。それでも痛みが薄れているのは不思議だ。このまま治ってしまうのではないだろうかと淡い期待を抱かずにはいられない。

そんな僕の心を読んだかのように、宿屋の主人は続けた。

「今は痛み止めを飲ませたから落ち着いているだろうけど……効果が切れたら痛みに耐えきれず暴れて叫び出すだろうね。出来たらその前に出て行って欲しいんだけど」

「え……………」

「無い袖は振れないんだよ。応急処置代と宿代だけでいいから。すぐにでも払って出て行ってくれ」

なんて冷たい言葉だろう。ああ、でもこの人は僕を魔物から助け出してくれた。それだけで十分なはずだ。それなのに、僕は薬が切れるのが不安で、なんとか助けて欲しくて……今生懸命、悲しい気持ちになっている。

思惑通り、涙が流れた。僕が今泣けば、情けをかけて薬をもう少し分けてもらえるかもしれない。もしくは、親に連絡する手段を探してくれるだろう。

そう思ったのに、宿屋の主人は眉一つ動かさず、僕の荷物を玄関に放った。

「泣いたって駄目だよ。君はずいぶんと甘やかされて育ってきたんだねえ。対価も払わずに世話になろうだなんて図々しい。卑しい子どもだよ」

「僕が……卑しい……………」

「ほら、金を渡しなよ」

「あっ」

腰元に括りつけておいた財布を奪い取られて、中身をすべて机の上に出された。そこには心ばかりの奨励金から、上等な防具を買った残りの僅かなお金。

宿の主人が苛立たしげに舌打ちして、知らずと身体が恐怖で揺れた。

「これじゃ一泊もできやしない……見通しも甘いときたもんだ」

「ああっ、あの、その……」

「ん？」

「お金、必ず、返します、ですから……痛み止めを、ください……そうしたら、お金全部置いて、出て行きます……」

「これじゃあ足りないっつってんだよ！！！！！！！！」

ドン！！！！！！！！！！

男の怒号が飛ぶ。机を叩く音が凄まじすぎて地震かと思った。僕はヒックヒックと泣きじゃくりながら必死に弱さをアピールする。無様なモンだ。だけど今はそうしているしかできない。

もうこの男に助けてもらえるかもなんて思っちゃいない。だけど僕は無力だから。追い出されるにしても、その後も誰かに助けてもらえるまで、こうやって泣き続けるしかないのだ。

「はあ～……いいかい坊や。こんな貧しい村じゃあ君を助ける奴なんていないよ」

「ウウウッ……ウウ～～ッ……」

「何かを手に入れるには対価が必要なんだ。君の武器はなんだ？ 親の金は遠方で役に立たない。腕に覚えはあったのかもしれないがそれじゃ剣も振るえない。じゃあ何があるんだよ」

「……………何も、ないです……………」

屈辱だ。どうして助けてもくれない奴にこんなことを言わされなきゃいけないんだ。

男は僕を叱ってハイになっているのか、僕が横になっているベッドのシーツを剥いで脇を持ち上げてくる。幼子のように抱っこされて、ただただその恐ろしい視線から逃れるために俯くしかなかった。

「……………小さい、な」

「へ……」

「よーし、薬を分けてやってもいいぞ。俺の言うことを聞いてくれたらな」

「え……！？」

突然どうしたのだろう。だがこの機会を逃す手はない。宿屋の主人が心変わりする前にと、僕は目に涙をいっぱい貯めて懇願する。

「お願い、します……なんでも、します」

「ブフフ……そうかあ、なんでもしてくれるんだな？」

宿屋の主人はにやりと口元を歪める。僕をそっとベッドに降ろすと、なんとおもむろに僕の腹から服の下に手を入れてきたではないか。胸部を撫でまわされ、もう片方の手では太腿まで……え、これもしかして……そういうことか……？

「う、やめてください……」

「今なんでもすると言ったばかりじゃないか」

「ウウッ……」

這い回る手が気持ち悪い。男の手だ……大きくて、分厚くて、カサカサしていて……こんな意味合いで身体を触られたことなんて、ない……まだそんな対象に見られる年齢じゃないと思っていたのに……。

ああ、だけど、こういう性的なことにドキドキしている自分もいるんだ……相手がおじさんじゃなかったら素直に喜べたのに……年上のお姉さん、とかだったら……駄目だ、武骨な手すぎてとても置き換えられない。

「あの……何か別のことで、えっと……」

「君にはこの若い身体しかないだろう。俺はいいんだよ？ 何もする気がないなら今すぐ出て行ってもらっただけだからね」

「グッ……」

少しだけ力を入れて右腕を掴まれた。暴力……というほどでもないが、それが引き金でズクンズクンと痛み出す。

これは、力を加えられたから……じゃ、ない……？ 内からどんどん湧きあがってくる不快感……もしかして、薬、切れかけている……？

「ハアッ……ハアッ」

「なんだ、痛んできたのか？ もう少しここにいるなら薬を飲ませてやるぞ？」

怖い……これからもっと痛くなるんだ、薬が切れたら……まともな治療も受けていないのに、こんな状態で痛みが最高潮になったらショック死してしまうかもしれない。

薬、もらえるなら……やるしか、ないのか……？

「痛み止め、ください……なんでもしますからっ……」

「よしよし。ほら、口を開けて……」

宿の主人は手早く薬を棚から取り出して僕の眼前にかざす。僕は大きく口を開けて、ついでに薬欲しきで舌まで伸ばしてしまった。それが悪かったのか、男は僕の口内に薬を落とし、その後、指でぐりぐりと僕の舌を撫でてきた。

僕の唾液がたっぷりついた指を照明に向ける。てらてらと濡れているそれをひと思いに口



の中に入れて、なんとジュルジュルと吸い付いた。いやらしく細められた目に、ああ……この人、やっぱりそういう趣味なんだって絶望した。

「ン〜〜うめえ〜〜ッ……」

「あ、う、う……」

なんとか薬を飲み込んだけど、直後にベッドの上で抱き寄せられて、顔を近づけられたので吐き戻しそうになった。なんとか堪えて、なるべくその口臭を吸わないように息を止める。男の指が僕の顎をなぞって、唇を擦って……またべろをグイグイと上から押し込んでくる。自然と、口が開いてべろを出してしまう。

「このべろ……指で触っただけで、気ン持ち良いナア〜……」

「ふああ……あ……」

「ほおら、おじさんとキスしようなあ」

キスだって。今すぐ胸を押し返して逃げたいが、右腕が役に立たない今そんなのは到底無理だ。なんせもう身じろぎもできないほどにしっかりと抱き込まれてしまっている。

男の膝の上に抱え上げられて、唇が触れる距離でじっと見つめられて、ああ……今からほんとうにキスされてしまうんだって実感する。

こんなの、もっとずっと先だと思っていたのに……親元を離れるってこういうことなんだ。全部自分でなんとかしないとイケない。旅立つのを決めたのは僕自身、魔物に勝てなかったのも……僕自身の鍛錬不足……………。

激しい後悔の念に囚われながらそっと目を伏せた。ムチュッ。生温い感触に唇を覆われる。ムチュツムチュツ。何度も食まれて叫びだしたくなるのを堪えながら、甘んじて受け止めた。

「ムッフ……キス、はじめてかい？」

「はい……」

「おほ、そうかい……べろを出してごらん」

いやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ。口には出せないからせめてと心の中で連呼して、実際には大人しくべろを差し出した。チュツチュツと先端を吸われて……ぞわり。全身を悪寒が駆け巡る。

男は急に勢いづいて、僕の肩をガシッと掴み、べろを丸ごと口の中に入れてジュルジュルとしゃぶってきた。気持ち悪いっ……。

逃げたい気持ちを腕の痛みが諫めてくる。今は無理だ。諦めろ。死ぬより、痛みに悶えるよりはマシじゃないか……僕は男だし、貞操なんて気にしなくても……。

「んおお、ジュツジュツジュツ！！！！！！ ……うんま……ンジュ〜〜〜ッ、ンジュ〜〜〜ッ♡♡♡ ジュピピピッジュピピピピピピピッ！！！！！！！！♡♡♡♡♡♡」

「……ッ、……………ッ……………」

「んふおおおお、んふお、デュウツ、デュウツ♡♡♡♡♡♡ ハアハア……ジュ〜〜〜〜〜ッ、ポン♡ ジュ〜〜〜〜〜ッ、ポン♡ ハアハア、おいっ」

「ふあい……？」

「お前も声出せっ……男に媚びる娼婦みたいに、キスで感じてる声聞かせろ……！」

「ふええっ……？」

舌先が触れ合ったまま喋られるだけで不愉快なのに、この上、声を出せだって……？

男に媚びる娼婦みたいになって、娼婦を見たことがないからそんなの言われてもわからない……。

だいたい、これってキスなのか？　べろをひたすら吸われて、しゃぶられて、好きにされているだけなのに……自分勝手に相手のべろを弄ぶ行為、これが大人の男には気持ちがいいものなのか……？

軽蔑しながらも、胸の中が小さく痙攣しているのが止められない。キスをしてしまった。それも、好きでもない相手と。保護をしてもらうという条件と引き換えに……。

それでも、気持ちいいわけじゃない……だから、声なんて、出せない……………。

「なんでもいいんだよお、うふんとかあはんとか、スケベな声出せって言ってんだ！　……オラ続けるぞっ」

「んぶううっ……ん、ふぁ……うふうん……あはあん……んじゅっ、んじゅっ……んう～～～ん……はあはあ、はあはあ……」

「い、いいぞ！！！！！！　ンジュッピジュッピジュッピジュッピ！！！！！！　んおお～～！！　ふんふんふんふん！！！」

男の両手に顔を挟まれて、差し出した舌をリズミカルに吸い出される。顔を前後してまで勢いよくそうされてなんだか頭がくらくらしてきた。

この男が満足すれば、解放してもらえる……薬が効いているうちに、もっと善良な大人のところに逃げよう……それまで少しガマンすれば、いいだけだ……。

「んゝ～！！　んゝ～！！　ぶほっほ♡　たまらん！！♡」

「んぢゅ～～！　んあ～～～、んあ～～～」

べろの先っぽを吸われながら動物のように鳴くと、男はますます喜んで僕の息を嗅ぎながらちゅるちゅると吸ってくる。

ああ、目眩がひどくなってきた……だってキスすらはじめてなのにこんな過激なこと、父や母が知ったら卒倒しそうだ……こんなはずじゃなかったのに……僕は、誰もが憧れる、勇者になるべき人間なのに……。

服の中で手が蠢いて、唇をいいように貪られて、僕はまさしく男の慰みものになっていた。数十分はそうしていただろうか。

ブチュ！　ブチュ！　と唇に吸い付いては勢いよく離すやり方に脳も痺れてきた頃、男は突然僕をかき抱いて首筋まで舐め始める。

「ああ！　たまらん！　少年の甘い匂いだッ！　フガッフガッ♡」

「ああう……やめてえ～～～～」

ギュウウツと締め付けられて右腕が痛い。明らかな暴力に泣きじゃくると、男はすかさず僕の涙を舐め取って、そのまま執拗な顔舐めが始まってしまった。

しくじった。コイツに同情なんて、求めちゃいけなかったのに……。

「もっと泣けっ！ フガッフガッ♡ 小さな顔♡ ゼーんぶおじさんのツバまみれにしてやるからなっ……！」

「いやっ、いやらあ、あ~~~~」

どんどん、僕の顔が穢されていく……大量のツバによって……………臭い……。

\*\*\*\*\*

サンプルはここまでです。

続きは製品版でお楽しみください！